

解説

大町桂月（明治二年～大正十四年）は韻文、隨筆、紀行などを能くする美文家として知られる。北海道や奥入瀬等を愛し、大雪山の一部にはその名を冠した桂月岳があり、晩年は奥入瀬溪谷の蔦温泉に居住し、ここで最後を迎えた。この紀行文でも感じるように、桂月の思想は国粹主義的であり、それだけに笠置山における後醍醐天皇の苦惱、楠木正成の忠君思想には、感じるどころがあり、相当力を入れて描かれている。

明治四十五年に発行された「筆のすさび」に集録されている紀行文「笠置山」は時代を反映して忠君愛国の思いにあふれ、これを受けて笠置山をそのシンボルとしている感がある。

当時は太平記や日本外史はよく読まれていて、世の人の常識となっていた。明治から戦前までの笠置山が、それらの代表的な舞台として、如何に人心に溶け込んでいたか、賑わっていたかがこの紀行文から伝わってくる。

なお文頭の男女についての考え方は、新興日本にありて、精神高揚している時代のもので、現在のものとは全く異なるが、これはその時代を反映するものとして受け止められたい。

笠置山を案内する紀行文のうち、江戸時代のものとして、月潭道澄の「笠置山記」・津坂東陽の「笠置山記」・斉藤拙堂の「陪游笠置山記」（いずれも拙書「笠置寺激動の1300年」に全文あり）をもって白眉とするが、この大町桂月の記は明治時代の笠置山を伝える最高のものである。

## 笠置山

### 一、男女の学生

高輪の泉岳寺を訪ふもの、誰か日本国民をゆかしき国民と思はざらんや。東京にて、年が年中、参詣者の最も多き処は、浅草観音也。之に次ぐものを泉岳寺となす。浅草観音には、御利益あり、加ふるに、さまざまの興行物を以てす。穴守稲荷や、成田不動や、河崎の大師や、堀内の祖師や、大久保彦左衛門の墓や、鼠小僧の墓や、みな、それぞれ御利益を以て人を惹く。泉岳寺には、唯、四十七士の墓あるのみ也。何も御利益あるに非ず。而して参詣者の絶えざるは、四十七士を慕ふ也。四十七士を慕ふは、義を解する也。

之を関西地方に求むるに、笠置山に上るもの、日に、多きは千人を越ゆることあり。少なきも百人に下ることなし。山上に寺あれども、別に御利益あるに非ず。風光美なれども、その為

のみにては、斯る都会より遠き山上に、日々、数百人を惹くべしとも思はれず。笠置山に上るものは、主として、後醍醐天皇行在所の跡を弔ひまつる也。

われ曾て日本外史を読み、太平記を読み、齋藤拙堂の笠置遊記を読み、頼山陽の笠置懐古の詩を読み、笠置山に上らむと思ふこと切なりしが、こゝに漸く思叶ひて、笠置駅に下りて、心覚え躍る。笠置山、今や、僅々数十歩の外に峙立せる也。想像せしよりも、笠置山は、低くして且つ小也。海拔わづかに九百五十四尺、山下の地が二百尺以上もあるべけれど、直立すること、町数にすれば、二町にも足らず。上には常盤木ありて、下には雑木生ひ、巖石、処々に露出す。このあたりの山々の中にも、低き方也。されど、孤立せるを以て、山城としては、一要害たるを失はず。北は直に木津川に接す。この川と西麓停車場附近の四五町の平地とを除きては、四面みな山又山谷又谷也。

駅前に導者を雇ひ、笠置の人家の間を過ぎ、やゝ南して、山の入口に達す。駅よりこゝまで三町の程に過ぎず。これより路は迂回して上る。勾配急ならず。凡そ二町にして、あばらなる小堂あり。下の堂と称す。二人の女学生の下り来るに逢ふ。いづれも、董を摘みためて手に持てり。又、二人の男の学生の下り来るに逢ふ。これは、何も摘み取りて居らず。女学生の花を摘み取れると男の学生の然らざるとは好一对の対照也。もとより女は、いつも花をつみ、男はつまぬとは限らざれども、こは、偶然に男女両性の特質をあらはせるものとおぼし。男の性は戦ふに適し、女の性は争ふに適す。われ曾て沈南蘋の画ける鶏の図を見しに、上に、さまで角ばらぬ巨巖ありて樹木生ひ、下に雌雄二羽の鶏あり。雌鶴は、微虫を見付けて、体を屈して、唯わけも無く嬉しうに、之を食はむとし、雄鶏は、虫などには目もくれず、昂然として立ち、口を開きて歌はむとす。われ、この意匠を面白しと思ひぬ。女は、概して、愛に生死す。男にして愛にのみ執着するものあらば、餘程の意氣地無し也。利慾に執着するも、凡物たるを免れず。われ今この一对の男女の山上にありし様を想像するに、男は、巖頭に立ち、天下を小とするの概を示して、放吟せざりしや。女はよき花は無きか、あの木が取りたしなど、うろろう見廻らざりしや。

## 二、笠置寺

四町目の掛茶屋に小憩し、六町目に、上の堂を見て数十歩ゆけば、導者曰く、こゝはもと、仁王門のありし処にして、元弘の戦に一の木戸を設けたりし処也。頂上まで、一二町に過ぎず。当年、賊の大軍、押寄せて、鬨の声をあげたるが、官軍は、山上にこもりて、音もせず。賊兵やすやすと、こゝまで上り来る。山上より、足助次郎現はれ出で、自から名乗り、強弓を引きしぼりて、一矢の下に、賊の一将、荒尾九郎を射斃し、二の矢にて、その弟、孫五郎を射斃す。これを手始めとして激戦しけるが、官軍に本性房といふ怪力の僧あり。大石を取りては投げ、取りては投ぐ。賊兵の圧死するもの其数を知らず、積屍、左右の谷を埋め、鮮血流れて、木津川為めに赤かりきなど語る。南の谷は、地獄谷の名あり。北の谷は、血染の谷の名あり。名のみを聞きてもぞつとするばかり也。

麓より凡そ八町にして頂上に達す。小さき山の割には、頂上は広し。笠置寺あり。山僧店を張りて、茶を売り、絵葉書をも売る。元弘の戦の前には、山上に四十九坊ありしが、今は、ただ、この一坊のみ存すといふ。鐘楼あり、古鐘懸る。建久元年の鑄造に係れる逸品なるが、近時国宝となりて、撞くこと能はずといふ。鐘楼を左に見て、少し行けば、路の左に椿本祠あり。其左に空地あり。もと天満宮の在りたる処也。醍醐天皇行幸あらせられし時、菅公扈從したりければ、後人、其徳を慕ひて、天満宮を建てけるが、後、山下に移されたるなりと云ふ。梅林を右に見、大師堂の石壇を左に見てゆけば、三大石相並ぶ。高さ四五丈。堂堂として天を衝く。これ笠置寺の本尊也。右が弥勒石、左が薬師石、中央が文珠石、それぞれ其名に負へる仏像を刻みて、之を内にして偉大なる本堂建ち居りしが、元弘の兵火に、堂は焼け、像相も消え失せたりなど説明す。この三大石を包蔵したりし堂の大きさ想ふべし。今は巖前に正月堂といふ小堂いと古りて、扉閉ぢたり。十三重の石塔苔を帯びて、笈々として高し。樹木さへ四面を蔽ひ、境目から幽怪也。

正月堂の後をゆけば、前の三石に譲らざる大石二つ並ぶ。金剛界石となし、胎藏界石となす。二石の間は、千手窟と云ひ、一に龍窟と云へど、石缺けて、今は窟らしくは見えず。又前の五石と彷彿たる巨石あり。其面に、仏像を刻めり。虚空蔵石と

いふ仏名を負ひたるなり。其仏像石に応じて、甚だ大なるが、線画にして、彫り出せるにはあらず。胎内潜を過ぎ、太鼓の音するといふ太鼓石の下をくぐりて、巨巖の上に立てば、高さ五六尺周囲二三十尺の石あり。押せば動揺す。曰く、揺ぎ石也。見下す谷の彼方には、小瀑懸る。曰く千手滝也。東北なる山の彼方に、白壁ぼつぼつ見ゆるを指して、あれは○○○村也（注・伏字とする）。当年、賊は、あの村の民に案内を頼み、風雨の夜に乗じて登り来り、火を放ちて賊を陥れたるなりといふ。頼山陽が

居民為<sub>レ</sub>我指<sub>二</sub>村墟<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>賊鄉導<sub>一</sub>。実由<sub>レ</sub>渠。至<sub>レ</sub>今猶不通<sub>二</sub>婚嫁<sub>一</sub>。童孀唾罵斥如<sub>レ</sub>奴。嗚呼蚩氓猶能弁<sub>二</sub>大義<sub>一</sub>。寄<sub>レ</sub>語人間士大夫。

と、痛快の語を吐きたるは、こゝの事なりと、現に其村を見て、感慨一層深し。今もなほあの村の者とは交際せぬかと問へば、然りと答ふ。何故にと念を押して見たるに、こはそも如何に、癩病村なる故に嫌ふなりといふ。更に語をつぎて、其癩病も天罰なりと、肩を聳かす。

### 三、元弘の乱

松の枝にすがりて、偉大なる平等石の上にのぼる。木津川脚下に在り。眼界は南北にせまくして、東西に長し。東は遙に伊勢の兜山を望み、西は遙に摂津の六甲山を望む。掛茶屋に少憩し、菅公冠掛松の枯木となれるを路傍に見て、西に転ずれば、一大石立てり。貝吹石といふ。西と南北との眺望ひらけたり。導者遙に西方の翠峰を指して、奈良の春日山なりといふ。戻りて東行し、北に数十級の石段を攀づれば、石柵あり。中に樹木しげる。弥勒、薬師、文珠三石の上に当る。これ当年本堂のありし処にして、後醍醐天皇の行在所に充て給ひし処也。

元弘元年八月二十四日、後醍醐天皇は都を出で、ひと先づ奈良へ行幸あらせられ、二十九日、移りて、茲にたて籠らせ給ふ。今の曆にて云へば、九月の末、秋既に深く、冷風身に浸む頃也。集まれる兵としては初は僅に五百騎に過ぎず。増して漸く三千騎となりたるも、もとこれ烏合の衆也。山陽の「龍旂憑<sub>レ</sub>險事倉卒」とは、言ひ得て盡せり。寺を俄に城としたれば、防備は不十分也。兵糧とても、久しくは支へ得ざるべし。而して四面より来り攻むる北條の軍は七萬騎に余れり。

憂かりける身を秋風にさそはれて

思はぬ山の紅葉をぞ見る

との御製、今に遊客の腸を断たしむ。されど、さすがに、天陰の地なれば、凡そ一箇月は支へ得たり。火攻の不意撃なくば、未だ斯く俄に陥らざりしなるべし。火攻の策を講じたる陶山、小見山の二賊將、憎しとも憎し。されど、順逆を離れて考ふれば、その胆勇は取るべし。攻城三十日にも及べども、未だ陥らず。この天陰、兵力のみを以て、急に抜き難し。二將は部下の五十人と共に死を誓ひぬ。決死の前には、堅城なし。天なる哉九月二十八日の夜は暴風雨也。決死の五十人、北方の險を攀づ。官軍も、此方面は險を待みて、備へざりければ、悟られずして城へ入り、大胆にも城中残る限なく見廻はる。五十人の足音は、さすがに、それと怪まれたれど、風雨烈しければ、夜廻りをするなりとごまかし、明きたる一堂を見出して火を放つ。火入りたりと思ひ、山下の賊は、内応者ありとて、勇んで攻め上る。見るまに、一山、火となりぬ。惨烈なる哉、かくて、城は、もろくも陥りたる也。

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠家も無し

の御製、益々、遊客の腸を断たしむ。いたましい哉。一天万乗の御身、随へるものとは、ただ藤房兄弟二人、踏みもならされぬ野に、山に、路は抄らず、餓うれども、食を求むる家もなく、草を枕に夢も結ばれざれし当日の御難義の程、思ひつまるだに涙也。和束郷の山中にて捕へられ給へりとあれどその場所は、さだかならず。木津川より北の方、鷲峰山のあたりにや。

#### 四、行在所の遺趾

明治の聖代、われ元弘行在所の遺趾の前に立ちて、五百年前の昔を緬想すれば兵馬の声も聞ゆるが如く、風雨の夜の猛火も見ゆるが如し、目には、陽春四月の光景あり。心には、元弘の世の秋風咽ぶ。松と梅の若木を植えて、木棚をめぐらし、中間に榜して 竹田宮殿下御手植の松竹梅としるしたり。導者に向ひて、竹は何処にかと問へば、竹田の宮の竹が、即ち竹なりとて笑ふ。大師堂を過ぎて梅園にいたる。山上の一周、これに

て終はれり。およそ七八町の程也。歩々すべて歴史の跡あり。怪岩奇石、応接に違あらず。緑苔、長へに露を含み、青松、空しく当年の操を守る。眺望の佳、風光の美、人をして、歩の移つるを覚えざらしむ。麓より往復二十三四町、路も険ならず、老幼も上るを得べし。処々に茶店あり。この日、二三時の間に三四十人の遊客にあへり。平生遊客の多きこと、推して知るべき也。

今昔物語に拠れば、天智天皇の御世、文武天皇まだ皇子にておはせし時、この山獵し給ひしに、鹿出でければ、馬を駆つて追ひ給ふ。鹿見えずなりて、はやり切つたる馬、あはや、懸崖より落ちかゝる。皇子心に山神を念じ、命助からば、こゝに弥勒の像を刻まむと誓ひ給ふに、馬、静に退きて、辛うじて無事なることを得給へり。よりて、弥勒の像を刻み給ひけるが、それが寺の基となりて、後世、良弁僧正、こゝに堂宇を建てたりと也。笠置寺の縁起には、文武天皇を天武天皇にし、寺もその勅順に成るとせり。地勢、よしや、多少の変化はありしも、この山に馬は受取り難し。

十訓抄に拠れば、中納言和田麿の子孫、余古大夫といふもの、三輪市の傍に城を構へて住みけるが、妻の事より争ひ起りて、敵に攻め寄せられ、城陥り、漸く身を脱して。笠置山中の窟内に潜む。一匹の大蜂、窟口の蜘蛛の網にかゝりて、脱する能はず。憐みて、放ちやりけるに、その夜、柿の水干着たる男あらはれて、君敗れたれど、なほ二三十の兵は残れるなるべし。それをこゝに呼び集め給へ。この山にわれら蜂の群四五千ばかりあり。力を合せて、助勢せむと云ふ。その言に従ひて、残兵を集めたるに、敵兵三百ばかり来り攻む。衆寡もとより敵せざれども群蜂雲霞の如く敵軍に向ひ、一人毎に二三十乃至四五十とりつきて苦しむるに、敵は弓矢も取れず、之に乗じて、敵軍を殺しつくし、目出度く本城に安堵するを得たり。蜂も死するもの少なからざりければ、為めに堂を建て、毎年忌日に法養を営みけりと也。

後鳥羽上皇の導師となり、解脱上人の諡号さへ賜はりて、徳望一世に高かりし名僧貞慶も、その晩年の五六年前までは、笠置の寺に居ること、二十年の久しきに及べり。召されて、一杖一笠、瓢然として玉階の下にあらはれしばかり、物に拘はらざれど、一身規律に合し、法を説けば、百官舌を捲いて驚嘆す。

春日神社に詣れば、群鹿も敬して、うづくまりたりとぞ。上人の遺徳、笠置の山をして一層靈ならしむ。楠公も、一たび、この行在所に召されしことあり。山陽の「藤公伝」勅楠公跪、此処是耶未可<sub>レ</sub>知」の句、殊に痛切なるを覚ゆる也。

## 五、有市鉱泉

笠置山を下り、一旅店に小憩し、導者と別れて、木津川を舟にて渡る。笠置山、清流を圧す。さきには見下して、面白しと思ひ、今は見上げて、また面白しと思ふ。一方には、絶壁怒立し、水深くして淵をなす。一族の人家、川を夾む。南を南笠置と云ひ、北を北笠置といふ。国道は北に通ずれども、汽車は南に通ず。南には、旅店四五軒あれども、北には、商人宿が唯一軒あるのみ也。

木津川の右岸を上りつゝ、笠置山の北面を見る。巨石多く露出す。中腹なる自然の巨石の面に、行宮遺址の四大字刻まれたり。小松宮殿下の御筆蹟也。一町へだたりても、文字明かに見ゆ。その大き、知るべし。

今に婚家を通ぜずといふ〇〇〇の孤村を対岸に見て、有市の鉱泉宿に投ず。笠置駅よりは二十五六町、大河原駅よりは十七八町の程也。線路に接し、兼ねて鉄橋に接し、山麓に寄り、水に沈みて、危楼、勢飛ばむとす。泉質は、炭酸泉に属す。飲用にも適す。其味、ラムネの如し。泉源を見るに、川底に崛起せる大盤石の中にありて、滾々として湧く。一時間に幾石か出づるらむ。鉱泉の宿は唯一軒にて、浴用に汲み取るは、ほんの一小部分に過ぎず。惜しや、幾んど総べて川に流れ出づ。知らず、木津川の魚族、為に健なるや、否や。

## 六、明神の大滝

あくる日、明神の大滝を見むとて、上流さして行く。路、川と離れて、また逢ふ。大河原の停車場を過ぎ、北大河原の家並の取付より右折す。両山屏風の如く、川を夾む。一縷の細径、有るが如く、無きが如し。石切場までは、すたすた歩みしが、そこを過ぎては、歩行稍困難也。凡そ七八町来つらむと思ふ所に、石の洲ありて、水二派となり、凡そ四五十間の間、勾配稍

急にして、川水奔騰し、怒って鞆鞆の声を為す。これ即ち朝神の大瀧也。瀧つ瀬といふべきものにて、普通の意味に於る滝にはあらず。筏も下れば、鮎も上る。以て其の勾配の度を推すべし。滝の上の方に、巨巖孤立して、兜の如く、小松を帯び、満開の躑躅をも多く帯びて、甚だ美也。

明神の大瀧は、われ物の本にて知りたるが、それに拠りて想像せしとは、様も異なり、場所も異なるに、若しや、この外にもあるかとして、靴や、外套や、荷物やは、巖頭におき、身を軽くして巖をつたうて進む。処々の巖に、躑躅さけり。流鶯の声も聞こゆ。凡そ七八町にして、川一曲して一大深淵を為す。弓ヶ淵と称す。形によりて名付けたりとおぼし。而かも、引きしぼりたる弓也。その弓身には、巨巖虎蹲し、熊踞す。淵は静にして、少しも波だたず。物凄きばかり紺碧也。深さ百尋に余ると云ひ伝ふ。蛟龍や潜める。前の大滝とは、好一對の対照なるが、余は、寧ろ、この淵の崇高の趣を取らむ哉。

又七八町ゆけば、川二つにわかち。木津川こゝに終りて、右は名張川となり、左は伊賀川となる。こゝにも可成りの急湍あれど、前の急湍には比すべくもあらず。伊賀川の右岸をつたふこと十三四町にして、終に笹瀬橋に達す。大河原より月瀬へ通ふの路に当る。こゝに始めて人に逢ひて、問へば、やはり、さきの急湍が、明神の大滝なり。さらばとて、引きかえし、荷物など置きたる巖頭に戻り、やれやれと、先ず帽子を脱ぎ、上衣を脱ぎ、ちよつきを脱ぎ、しゃつまで脱ぎて、上半身の汗を拭ひ去れば、心すがすがし。煙草吹かして瀧つ瀬を眺め、巨巖を眺め、躑躅を眺む。去らむとして、顧みれば、帽子なし。さては、知らぬ間に、風伯の奪ひ去りけるにや。いと粗末なる、古びたる鳥打帽也。それが風に吹き去られしとて、何の事もなけれど、われには思ひ出無きにもあらず。先頃、一友人の家にゆきしことありしが、細君氣付きて、帽子が、かはれりといふ。そのまゝかぶりて、他の友人の家にゆけり。後、ふと路に相逢ひ、帽子がかはれりと云はれて、始めて、それと知りて、とりかへたり。つい、四五日前、学生の集会へ赴きしが、また、かはれり。いづれも、茶色がかりて居りしが、此度のは、裏が無ければ、直に、それと氣付きたり。元来、旅には、鳥打帽を最も便とす。風に飛ばされぬことと、林藪の中を行きても、枝にさはらぬこととは、他の帽子の企て及ばぬ所也。また、他の帽

子は頭の大小によりて、合ふ、合はぬが有れど、烏打帽だけは、何人にも合ふ。これは、便利でもなけれど、烏打帽の特色也。その代りに、取りかへられ易き也。さるにても、三たびまで取りまちがへ、終に風伯に奪はる。よくよく間の抜けた男と、帽子や笑はむ。

(終わり)